大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

戦前から戦後にかけての頭髪における記事分析：『主婦之友』から読み解く黒髪の変遷

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-04-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 横山, 友子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00016819

人間社会学研究集録15(2019)，93-112（2020年3月刊行）

戦前から戦後にかけての頭髪における記事分析

――『主婦之友』から読み解く黒髪の変遷――

横山友子

はじめに

女性の頭髪は、その髪形を見れば、どの時代のものかが分かるほど時代を映し出す特徴をもっている。髪形が変化していくだけではなく、頭髪に対する価値観や周囲の評価、手入れの方法、髪飾りや頭髪に関する悩みやそれに対応した療法なども変化していった。それは、一個人の価値観のみで変化していくのではなく、当時の生活様式やインフラ、国家政策、メディアやジェンダー、衛生に関する取り組みに大きく影響を受けていた。江戸時代に定着していた日本髪から鹿鳴館時代に上流階級で流行した庇髷、便益・衛生・経済の三点で奨励された束髪、第一次世界大戦後の好景気の中、欧米の流行を取り入れたパーマネント、モダンガールの特徴ともいえる断髪などが例としてあげられる。

本稿の目的は、戦前から戦中、戦後にかけて女性の頭髪への価値観や頭髪の手入れの方法が、どのように変化していったのかを明らかにすることである。そのために、大正期に創刊され、大正期から昭和初期にかけて最も購買数が多く、戦時体制に入って女性雑誌として独占的な存在となった『主婦之友』が掲載されていた記事のなかで、女性の頭髪に関してどのようなメッセージを読者に発信していたのかを分析した。

1 章では、先行研究の分析から得られる知見を明らかにし、大正から昭和初期にかけて時代を風靡し、この時期の婦人雑誌では最も多く読まれた『主婦之友』という雑誌がどのようなものであったか社会的位置について概観する。2 章では、『主婦之友』の「髪」に関するキーワードが含まれる記事の分析方法について述べ、次いで触れている記事の変遷について述べる。3 章では、30 年の記事を 10 年ごとに分け、それぞれの時代の背景とともに記事について考察する。

1．婦人雑誌『主婦之友』の分析

1.1　女性の頭髪の先行研究の分析

女性の頭髪に関する先行研究には、髪形の変遷を扱った研究（江馬 1953; 南 1984; 大原 1988; 飯島 1986; 平松 2012）や時代背景とともに変化していく生活習慣とともに化粧、ファッションなどと一緒に髪形を分析する研究がある（ポーラ文化研究所 2016; 坂本 2019）。髪形の変遷について、江馬（1953）や南（1984）は、古墳時代から昭和初期までの女性の髪形を鬘で結ったものを写真で紹介し、どのような女性がその髪形をしていたのかを髪形が持っている意味も含めて記載されている。さらに、時代ごとの結髪や結髪の方法を実際に鬘を用いて結ったものを写真を提示して説いている。橋本（1998）は古墳時代から江戸時代の髪形を絵巻物などの書物、調度品から男女や身分の違いに分けて記載している。加えて、そのときに使用されていた髪飾りを紹介し、髪形と髪の装飾品を多くの写真とともに説いている。大原（1988）は飛鳥・奈良時代から明治時代までの男女の髪形と髪形の意味を、時代背景を踏まえて記載している。飯島（1986）は「古事記」などの日記、和歌、文学などの作品から髪に神聖な魔力があると信じられており、気高さと力にふさわしい丁寧な取り扱いをされていた根拠を述べている。また、日本だけでなく、海外の言い伝えなども含まれている。さらに、結髪師から美容師の教育、収入、労働環境など頭髪にかかわる職業についても述べられている。平松（2012）は髪形と当時の社会背景と関連付けた研究がなされている。高橋（1999）は、大正期に出現したモダンガールと断髪を『青踏』や『キング』、新聞などを用いて断髪する女性がどのような心境であったか、どのような目的があったか、また、周囲の反応を含めて紹介し、歴史的背景とともにメディアに登場する女性の変化を分析している。坂本（2019）は女性雑誌を用いてファッションとともに変化した明治中期から昭和初期にかけて日本髪から束髪、洋髪への変化を女性雑誌『女學雑誌』『婦人世界』の記事の一部の引用のみで頭髪については端的にまとめられている。鈴森、村田、津田ら（2016）は、明治期から昭和初期までを政治、生活、文化、女性、服装、髪形、化粧という項目ごとに分け、ポスターや広告、婦人雑誌を用いて時代ごとの特徴を述べている。他に、横山は明治中期から大正中期まで

を『婦人衛生雑誌』を用いて（2016）、明治後期から昭和初期までを『婦人世界』を用いて（2017，2018）それらの雑誌の購買層に向けられた記事を分析することで髪形だけでなく、頭髪がどのように扱われてきたのか、手入れの方法の変化や頭髪に関する清潔感の変遷を記事数および記事内容から分析している。本稿は戦前から戦時中の女性の頭髪がどのように『主婦之友』の記事で扱われていたのか、記事数および記事内容の分析を通じて、当時の女性の頭髪に関する価値観の変遷を読み解きたい。

1.2　婦人雑誌『主婦之友』

『主婦之友』は、石川武美によって主婦之友社から大正6年に創刊された。「結婚したら、子供が生まれたら、知りたいこと、教わりたいことが山ほどあるはずであり、『主婦之友』は、その主婦たちの切実な要望に応えるものにしたい」という思いがあった[1]。石川は、『主婦之友』について、「お友達となつて、及ばずながらも御相談相手にもなつてゆきたい。この願ひは時と共に事實となつてまゐりまして、今日のごとき親しき間柄の皆様と私どもとなることができた」[2]と述べており、家庭および婦人の味方として女性に理解ある雑誌を目指し、寄り添っていることを自負していた。

明治後期から就学率、識字率が向上し、読書をするようになった上流階級の婦人や女学生を対象にしたさまざまな新雑誌が創刊され、中には発行部数が数万～数十万部に達するものも出現した（大塚 2018:74-75）。第一次世界大戦後、都市における生活水準が急速に向上し、新中間層が出現し、各階層が戦前を通底する生活構造を確立していった（大塚 2018：74）。また、農村部でも日露戦争以降、綿畑から桑畑へと変わり、農業に従事していた女性にも現金収入の道をもたらし、他にも生糸製糸工場など女工が増え、女性の労働は就労と共に重くなっていったが、村は現金を使って消費する生活へと変わっていった（石崎 1993：196）。その中でも、『主婦之友』は、従来の婦人雑誌より低い階層に焦点を当てることで大成功を収めた。昭和6年の毎号別冊付録に始まった婦人雑誌の付録競争はますます激化したが、「主婦之友」の昭和9年新年号は、実に

[1] 『主婦の友社八十年史』主婦の友社社史編集委員会 1996（平成8）年 p. 15
[2] 『主婦之友』第8巻第3号 1924（大正13）年 p. 74

15 種の付録をつけて世間を驚かせた[3]。

昭和 15 年の夏、二度目の近衛内閣ができて、いわゆる新体制運動が繰り広げられた。内閣情報部は情報局という大きな組織になり、言論統制の元締めとなった。用紙は軍需品だというので雑誌用紙は 2 割 5 部の削減となり、出版統制の時代であった。

昭和 16 年 12 月 8 日真珠湾攻撃によって、ついに米英仏の連合軍を相手にする全面戦争となった。17 年 2 月号は、この開戦の詔書を掲載した。太平洋戦争が始まり、戦局が厳しさを加えてくると、出版用紙も不足し雑誌のページ数は号を追って減ってきた。しかし一方では食糧事情、衣服事情が窮屈になるにつれ、「主婦之友」の生活実用記事が、ますます重要視されて、雑誌の売れ行きは逆に好調であった。[4]

『主婦之友』の目次には、昭和初期から「『主婦之友』は御覧のあとで保存しておけば必ず大きいお役に立つ機會があります」と記載されていたが、昭和 12 年に発刊された 21 巻 9 月号より「慰問袋に主婦之友」と銘打ち、状況の変化がうかがえる。

戦争時の物不足のもとで、ページを減らしたり、印刷方法を単純化したりして、雑誌の発行を継続する努力を重ねた。その頃の主婦之友の目次には、品薄のため近所で回覧するようにお願いが書かれ、どのように回覧すべきか方法までも記載されていた。

昭和 21 年になると、「主婦之友」も 96 ページになり表紙は 4 色刷りで、雑誌としても活気を取り戻しつつあった。その一方で、戦後、大きな発言力を持つようになった出版会の新興勢力からの戦時中の戦争協力への追及の声は厳しかった。

1 月 24 日に開かれた日本出版協会の総会で、主婦之友社など 7 社は戦犯 7 社と名指しされ、一挙に除名されかねない状況におかれたが、中央公論社、文藝春秋新社なども加わって全国出版協会となり、やがて書籍出版協会と統一されていく。[5]

『主婦之友』は引き続き平成 8 年 6 月まで発売された。戦前、戦時中、戦後

---

[3] 『主婦の友社八十年史』主婦の友社社史編集委員会 1996（平成 8）年 p. 43
[4] 『主婦の友社八十年史』主婦の友社社史編集委員会 1996（平成 8）年 p. 61
[5] 『主婦の友社八十年史』主婦の友社社史編集委員会 1996（平成 8）年 p. 75

にも継続されて発売され続けた唯一の婦人雑誌でもあった。

2.『主婦之友』の「髪」に関する記事の分析

2.1　記事分析方法

本稿の分析対象は、第1巻から第30巻（1917〈大正6〉年～1946〈昭和21〉年）における頭髪に関する記事である。研究方法は以下の手順に従った。

(1)『主婦之友』に掲載されている頭髪に関する記事を雑誌本文の文章よりすべて抽出した。ただし、雑誌の情報提供の機能を分析したいため、読者から寄せられた質問、質問に対する回答は除外した。

(2) 抽出した記事を「髪形」、「頭皮・頭髪の手入れ」、「髪に関する職業」、「頭皮・頭髪の療法」、「髪飾」にカテゴリー分けした。ただし、幼女、少女、女学生についての記事は分析の対象外とした。

(3) 分類した記事から、『主婦之友』の執筆者や読者が女性の髪をどのようなものとみなし、それがどのように変化していったのか、その背景を探った。

なお、本稿ではこれらの記事を、第1期を1917（大正6）年から1926（大正15）年、第2期を1927（昭和2）年～1936（昭和11）年、第3期を1937（昭和12）年～1946（昭和21）年の10年ごとを3期に分けて分析している。頭髪の変遷に関して、どのような時代区分を用いるのかについては、その変化の背景となる社会的な出来事と、分析の対象とする雑誌の記事数の両方を考慮する必要がある。上記の区切りにしたのは、社会的な出来事に関して、社会・経済状況に大きな変化をもたらした第一次世界大戦、関東大震災、大正デモクラシーの全盛期を経た大正期と、第二次世界大戦の戦前と、戦中・戦後で分け、記事内容の変化をより明確に提示できると考えたからである。

3.『主婦之友』の記事からみる女性の黒髪に対する評価の変遷

3.1　『主婦之友』に掲載された黒髪に関する記事の概要

頭髪に関する記事は、30年間で261本掲載されている。数量的に整理する

にあたって、大カテゴリーとして「髪形」、「頭皮・頭髪の手入れ」、「髪飾」、「頭髪に関わる職業」、「頭皮・頭髪の療法」の5つに分類し、各カテゴリーの記事数を図1に円グラフ化した。一つの記事に、複数のテーマが存在することもあるため、記事数とカテゴリーごとに分類したテーマ数は同数ではない。

「髪形」については、「日本髪」「束髪」「洋髪」「ウェーヴ」「婚礼用」「断髪」に分けた。「頭皮・頭髪の手入れ」については、「洗髪」「髪梳」「髪油」「髪染」「滋養」、「頭皮・頭髪に関する職業」については、「髪結い」「美容術師」、「頭皮・頭髪の療法」については、「湿疹」「脱毛」「無毛症」「禿」とそれぞれに小カテゴリーを設けた。「髪飾」については「ヘアピン」のみであったため、小カテゴリー分けはできなかった。また、それぞれを10年ごとに分け、各カテゴリーの記事数の変化を図2に表した。かつ、それぞれに小カテゴリーを設けた。

大カテゴリーでいえば、「髪形」が最も多く、全体の68%を占めた。「髪形」に関する記事は第1期から第2期にかけて大幅に増加した。『主婦之友』の誌面に掲載された頭髪に関する記事は多様であり、刊行当初120ページだった雑誌は大正末期は300ページにまで増え、昭和10年には600ページにまで増加した。大正期の婦人雑誌は、読者が生活において活用できる実用的情報を大量に提供したことが、ページ数増加の大きな要因である（木村2010）。また、『主婦之友』は実用記事を別冊の付録にするなど大きく力を入れていた。第1期か

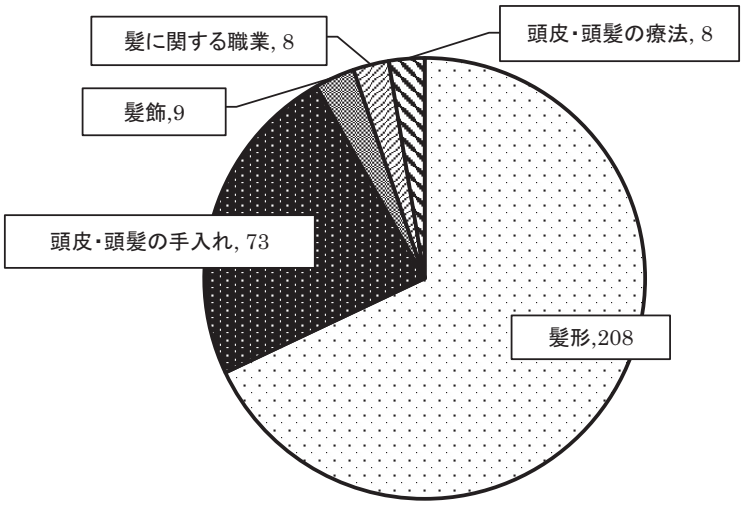

図1.『主婦之友』髪に関する記事割合

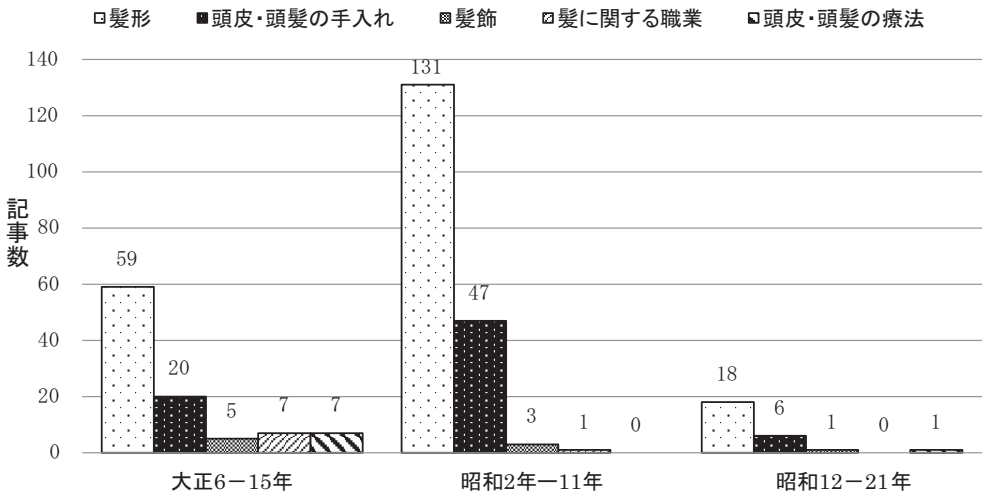

図 2.『主婦之友』髪に関する記事数の変化

ら第 2 期に頭髪に関する記事が大幅に増加したことについて、第 3 期に入るとページ数や記事内容の変化に伴い、急激に減少した。大正から昭和となり、軍部ファシズムが台頭して、第二次世界大戦が近づくにつれ政府による報道の制約、紙面の厳重な検閲が強くなり、昭和戦前期の「治安維持法」にてさらに言論統制法による「言論の自由」の抑圧が猛威を振るった（前坂 2007：29）。満州事変以降、差し止めの件数も多くなり、『主婦之友』の誌面も明確な戦争協力体制を打ち出し、どのように戦争を支えるかという実用記事に変化していった。雑誌のページ数も、昭和 15 年には 300 ページを切るようになり、昭和 20 年に入ると 50 ページ前後まで減少した。その中で髪について触れた記事は大幅に減少していった。紙の割り当てを大幅に減らされ、一冊あたりのページ数が全盛期の約五分の一に激減したことは大きな要因となったであろう。

次に、「髪形」を小カテゴリー化し、数量的変化を図 3 にグラフ化した。

「髪形」に関する記事の中で第 1 期は「束髪」に関する記事が最も多く、次いで「日本髪」、「洋髪」、「婚礼用」、「断髪」、「ウェーヴ」であった。第 2 期には、「髪形」に関する記事数が大幅に増加し、「洋髪」、「日本髪」、「ウェーヴ」、「束髪」、「婚礼用」、「断髪」の順であった。第 1 期に最も多かった「束髪」は 8 割減少し、次いで多かった「日本髪」については約 2 倍の増加であった。「洋髪」に関する記事は 8 倍になり、「ウェーヴ」に関しては 10 倍となった。第 3 期は、

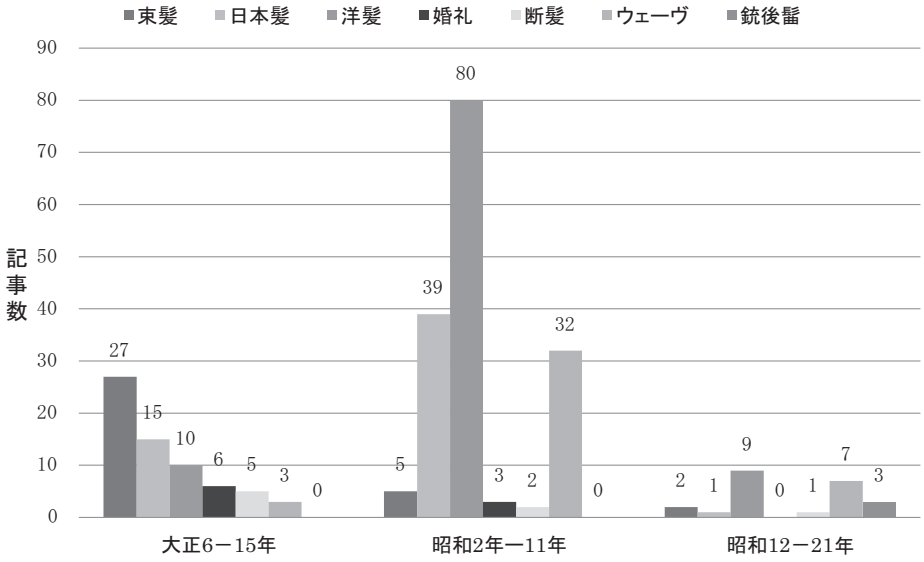

図 3.『主婦之友』髪形に関する記事数の変化

「髪形」に関する記事数が大幅に減少し、「洋髪」、「ウェーヴ」、「銃後髷」、「束髪」の順であり、「日本髪」と「婚礼用」は 1 件のみであった。第 3 期のウェーヴにはそれまでの鏝で作り出すウェーヴが 3 件の他に、初めてパーマネントウェーヴが 4 件登場した。また、銃後髷という髪形が初めて登場したことも特徴であった。

次に、「頭皮・頭髪の手入れ」に関する記事の中で手段について、第 1 期「洗髪」が最も多く、これは第 1 期から第 3 期までを通して記事数の増減はあるものの記事数が最も多い手段であった。次いで「髪油」、「滋養」、「染髪」、「梳髪」であった。第 2 期は「洗髪」に次いで、「染髪」、「滋養」、「梳髪」、「髪油」が続いた。また、新たに「マッサージ」という手段が登場した。第 3 期は「洗髪」が最も多かったが、記事数はわずか 4 件まで低下し、次いで「梳髪」の 2 点のみであった。「頭皮・頭髪の手入れ」の原因としては、「赤毛」が最も多く、次いで「白髪」、「癖毛」、「抜け毛」であった。

頭髪に関する記事の書き手は、女髪結師、美髪師などの髪を扱う職業もしくは、髪結や美髪師を育成する学校の教員がほとんどを占めている。それらの記事は、全編を通して流行の髪型、推奨される髪を保つ手入れの方法などが挙げられている。

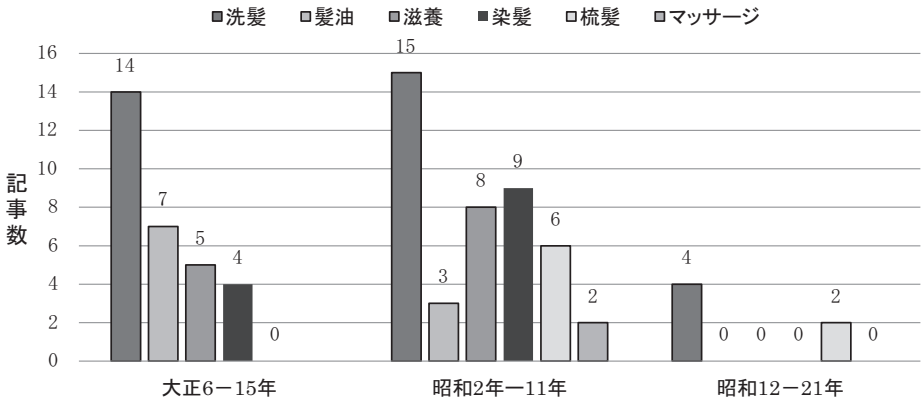

図 4.『主婦之友』頭皮・頭髪の手入れ（手段）に関する記事数の変化

これらのデータをもとに、女性の頭髪に関する記事がどのように掲示されていたのか、その内容は時代によってどのように変化していったのかを、記述された記事を数量化し、具体的に背景を含めて述べていきたい。1917（大正 6）年から 1926（大正 15）年の第 1 期の特徴は、髪形に関する記事が多く、束髪が最も多い。1927（昭和 2）年から 1936（昭和 11）年の第 2 期は、日本髪から洋髪への変換期であり、第 1 期より洋髪が最も多く登場する。また、ウェーヴを取り上げる記事が多いことを特徴とする。1937（昭和 12）年から 1946（昭和 21）年の第 3 期の特徴は、記事数は少ないが、戦争の特長が色濃く出た新しい髪形が出現し、読者の日常生活が大きく変化していったことがみられる。以上の時期ごとに、分析を行っていきたい。

3.2　第 1 期 1917（大正 6）年から 1926（大正 15）年

『主婦之友』の頭髪に関する記事は、69 本であった。テーマは、「髪形」に関する記事が 59 本、「頭皮・頭髪の手入れ」が 20 本、「髪に関する職業」が 7 本、「頭皮・頭髪の療法」が 7 本、「髪飾」が 5 本であった。

次にテーマごとに、その内容をみていく。「髪形」については、流行である髪形を提示しているものが多い。特にタイトルに「東京で流行る」「新東京で流行の」という言葉を付けた記事が多い。「前髪に大きな芯を入れて庇に突き出すのなどは、ごくの野暮としてすつかり廃れてしまひました。大抵前髪は七三に分け、あつさりとしぜんなふくらみを持たせるやうにし、飾りなども簡

単なピンを一二本用ひる位です。」[6] と、すでに庇髪に結う人が見られなくなり、東京の若い婦人の流行が移り変わりを変化していることについて述べている。また、「日本では未だ断髪は珍しいもののやうに思はれたり、問題になつたりいたしますが、西洋では大半断髪だと言つてもいいほどの流行をみてをります。東京では、だんだん断髪の人もふえて来ました。」[7] と関東大震災後、髪形にも変化があったことが記載されている。しかし、髪形が変化しても、黒髪に対する価値は変化がなく、創刊当初に「黒髪は男女を問わず日本人の誇りであります」[8] と記載されており、断髪が流行し始めたと述べている大正 14 年にも、「日本人は、事新しく申上げるまでもなく、昔から癖のないふさふさとした、緑の黒髪を理想としてをりましたが、今も尚ほそれが標準となつてをります」[9] と記載されている。髪形については、職業婦人が増え、実用的に髪形と変化していくも、癖のない黒髪を美しいと述べ続ける記事を掲載し続けている。

「頭皮・頭髪の手当て」については、美しい頭髪を保つには、頭髪の衛生に保つよう訴える記事が見られる。「髪の手入として第一にいたすべきことは、髪洗ひであります。埃をあびたり、汗を出したりして汚れた髪をそのままにおくことは、髪のためにも、また衛生上にも悪いことなのです。」[10]「髪の手入れとして第一にしなければならないことは髪洗ひでございます。」[11]「毛髪を立派にし美しくする第一の要件は、清潔といふことでございます。その手入れの第一は、洗髪であります。」[12] と美しい頭髪を保つために衛生にすること、そのために洗髪を推奨することが記載されており、美しいことと衛生が結び付くような記事を掲載している。とはいえ、洗髪の頻度は 1 ケ月に 1 回、通学生や職業を持つ人には 1 ケ月に 2 回程度であり、頻回に洗っているわけではない。洗料は布海苔、うどん粉、椿の実、玉子などが多く、ほとんどは布海苔とうどん粉を推奨している。「洗髪料は最近いろいろなものができて、簡単に洗へるようになりましたが、やはりうどん粉と布海苔、または椿の搾り粕などが、日本人

---

[6]『主婦之友』第 4 巻第 1 号 1920（大正 9）年 p. 142.
[7]『主婦之友』第 9 巻第 7 号 1925（大正 14）年 p. 287.
[8]『主婦之友』第 5 巻第 12 号 1921（大正 10）年 p. 141.
[9]『主婦之友』第 9 巻第 10 号 1925（大正 14）年 p. 222.
[10]『主婦之友』第 7 巻第 4 号 1923（大正 12）年 p. 55.
[11]『主婦之友』第 7 巻第 11 号 1923（大正 12）年 p. 279.
[12]『主婦之友』第 8 巻第 9 号 1924（大正 13）年 p. 243

の毛には適してをります。」[13] と記載されている。髪を洗うと「日光に当て風通しをよくして乾かす」[14] と記載されており、毎日できるものではなかったと考えられる。また、「私達は午の日には決して洗はないことにしてゐます。午の日に洗ふと落ち損ふそうです。」[15] と洗うことのできる日は天候のみに左右されていたわけではないことが記載されている。職業婦人である呉服売り場の販売員、看護婦、小学校教師に身嗜みを訊いている。洋装をしている女性が束髪をしており、毎日結び直していること、洗髪は1ケ月に1～2回、洗料には布海苔とうどん粉を使用している[16]。現在と比較すると洗髪回数は少ないが、「雲脂で困るといふほどのこともなく済みます。」[17] と述べており、不衛生を感じている様子はない。

第1期は、大正期の経済の発展により、新中間層が出現し、増加していった時期である。大正期は明治後期に90%を超える女子の義務教育就学率があり、初等教育だけではなく中等教育、さらに高等教育機関に進学する女性も増加し、識字率は大きく向上し、かつ資本主義発展につれてさまざまな職業が女性に門戸を開き、職業婦人が増加した。経済的自立が進んだ女性は、伝統にとらわれないモダニズムの感覚を持った女性の風俗を生み出し、脚光を浴び、憧れのまなざしが向けられた（平松 2012）。都市部では職業婦人に合わせた動きやすく、洗髪のしやすい洋髪が流行し、新たな髪形が生まれた。しかし、美しい黒髪に対する価値に重く審美性は残ったままであった。ただし、美しい頭髪を保つためには、清潔に保つことが関連付けられ、衛生と審美性が結び付けられて考えられるようになっていった。

3.3　第2期　昭和初期ーモダンガールから始まる多様化　1927（昭和2）年から1936（昭和11）年

『主婦之友』における頭髪に関する記事は、193本と第1期と比較すると約3倍ほど多い。最も多い記事は「髪形」について131本である。次いで「頭皮・頭髪の手入れ」47本、「頭皮・頭髪の療法」5本、「髪飾」3本、「髪に関する職

[13]『主婦之友』第9巻第10号1925（大正14）年 p. 223.
[14]『主婦之友』第7巻第11号1923（大正12）年 p. 279.
[15]『主婦之友』第10巻第6号1926（大正15）年 p. 186.
[16]『主婦之友』第10巻第6号1926（大正15）年 pp. 180-183.
[17]『主婦之友』第10巻第6号1926（大正15）年 p. 182.

業」が 1 本であった。

テーマごとにみていくと、「髪形」は、「洋髪」に関する記事が最も多く、80 本であった。次に「日本髪」が 39 本、「ウェーヴ」32 本、「束髪」5 本、「婚礼」3 本、「断髪」2 本であった。第 1 期と比較して、洋髪、ウェーヴ、断髪に関する記事の割合が多くなった。しかし、日本髪が廃れたというわけではなく、混在した記事がみられる。「自分の顔や姿には、どう結んだら釣り合うか、どんな髪形が似合ふか、といふことを先づ第一に考へねばなりませぬ。これは洋髪は勿論、日本髪の場合も、共に大切な結髪上の秘訣であります。」[18] と社会的地位や職業で分類されるのではなく、自ら似合う髪形を選択することができることが分かる。「日露戦争からこちら、日本髪が廃れて束髪が流行りだした。ところがこの頃はまたウェーヴをかけた洋髪が流行して、何でも四日も五日も解かないのださうです。四日も五日も解かなかつたら、それでこそ日本髪より不衛生です。毎日お髪を梳してくださることをお勧めします。」[19] と、決して洋髪にしていることそのものが衛生的ではないことを記載している。日本髪でも蒸れないよう、昔から対策が練られていたことを示す記事がある。「昔の女は、頭の眞中を圓く剃つてゐましたが、あれはよほど違ふと思ひます。」[20] と長く洗髪せずとも暑い夏を乗り切る工夫がされていた。しかし、清潔に着目した対応というわけではない。つまり、清潔に着目したからこそ、束髪、洋髪を推奨し、かつ手入れが不可欠であることを訴えているのである。

次に、「頭皮・頭髪の手入れ」の手段で最も多かった記事は洗髪 19 本であった。次いで染髪 9 本、滋養 8 本、梳髪 6 本、髪油 3 本、マッサージ 2 本であった。また、手入れを必要とする要因として赤毛 9 本、抜け毛 7 本、白髪 3 本、臭い 2 本、鏝 2 本、ふけ 1 本があげられていた。第 2 期の洗髪方法としては、第 1 期と変化なく、布海苔とうどん粉を用いて、2 週間に 1 回の感覚で行うことを推奨している。しかし、髪洗粉も広告でシャンプーとして出ており、「洗髪料としては、やはり布海苔とうどん粉をが良いのですが、これは、つい洗ふのが億劫になり勝ちですから、夏だけは、特に髪洗粉となつてゐる、質のよい洗粉で、洗ふことにいたします。洗粉ならば、直ぐに落ちますから。二週間に

[18]『主婦之友』第 12 巻第 5 号 1928（昭和 3）年 pp. 196-197.
[19]『主婦之友』第 12 巻第 8 号 1928（昭和 3）年 p. 214.
[20]『主婦之友』第 13 巻第 7 号 1929（昭和 4）年 p. 49.

一度は、厭でなしに洗へませう。」[21] と髪洗粉であれば洗髪が楽であることが記載されている。昭和元年の『主婦之友』の広告には、「髪洗い粉」に代えてシャンプーという語を用いるようになっている。シャンプーの広告が葛原工業所の広告で用いられるようになり、花王、資生堂と続いた。しかし、いまだ布海苔とうどん粉を推奨[22] するように、多くの人にとって洗髪は簡易にできるものではなかった。「私は早く汚れを落としたいばかりに、洗濯用の粉石鹸を用ひて、毎週洗つてゐました」[23] と気が付くと随分赤茶けて、髪が枯れたようになったこと、度を超すとかえってよくないと嘆いている。『主婦之友』では、結髪師や美容術師、女優を集め、度々美髪についての座談会を設けている。そこでも、洗髪回数の多い人が美髪だと語られ、なおも布海苔とうどん粉を用いて洗髪していることが話されている。記事の中では 2 週間に 1 回の洗髪をすることを推奨しているが、地方では三ケ月に 1 回程度しか洗わない人が沢山おり、洗髪の習慣が身に付いていないと記載されている。しかし、「この頃は乗り物などでも、あの厭な臭気に悩まされなくなつたのは、婦人全体が向上したといへませう。」[24] と都市部では以前より「厭な臭い」があったことに着目しており、臭いは消え、その変化は衛生面での向上と捉えていることが記載されている。

頭髪についても、少しずつ変化が見える。「昔から、髪は女性の生命として、歌にも詠まれ、美人の第一条件でございました。ですが、美髪と申しましても、標準が今日では大分變つたやうで、つまり昔は癖のない黒髪といへば最上としましたが、洋髪には、わざわざちぢらすのですから。髪の多過ぎるのも、結ふに手間どつて、近頃の生活には歓迎されませぬ。」[25] と美しい髪に関しての基準が大きく変化してきたことが伺える。また、髪色についても、「ただ黒いといふのでは、時代にそぐひません。昔のやうに、お化粧といへば白に定つた時代には、滴るやうな黒髪も美しいと感じましたが、色白粉で化粧する現代では、新しい眼で見ないといけないのではないでせうか。少々赤くても、今の服装に

---

[21]『主婦之友』第 12 巻第 8 号 1928（昭和 3）年 p. 214.
[22]『主婦之友』第 15 巻第 5 号 1931（昭和 6）年 p. 337
布海苔とうどん粉を用いた洗い方「うどん粉を水で溶いて（薄目にすること）そこに布海苔を千切つて入れ、煮立たせてください。かすがあるから、一度漉していただきます。これに毛をつけて洗い、すすぎを丁寧にーもうよいと思つてから、今一回すすぐ。」
[23]『主婦之友』第 16 巻第 10 号 1932（昭和 7）年 p. 371
[24]『主婦之友』第 16 巻第 6 号 1932（昭和 7）年 p. 438.
[25]『主婦之友』第 16 巻第 3 号 1932（昭和 7）年 pp. 360-361.

ぴつたり合つたのがございます。」[26] と変化してきたことを記載している。

明治以降に日本政府は疫病の対策に衛生に着目し、富国強兵の方針とともない、個人及び公衆衛生を啓蒙してきた。束髪の啓蒙も衛生の一環であった。関東大震災以後の住環境や下水整備だけでなく、洗髪しやすくなった髪形、職業婦人の増加によるイエからソトへ女性の活動範囲の拡大は、必然的に髪の洗浄回数の増加につながったと考えらえる。大正から昭和十年代前半にかけて、第一次世界大戦の影響で国内は好景気に沸き、人々の生活は次第に豊かになり、都市を中心に衣食住など日常生活のなかにも西洋の生活習慣が取り入れられるようになった。この時期は上流階級や富裕層を中心におこなわれていた洋風化粧が一般女性の間に少しずつ浸透し、欧米の生活スタイルが積極的に吸収する風潮があった（山村 2016：126-127)。18 世紀のヨーロッパで教養ある上質な生活様式を送る人々にとって、身体の清潔と身辺の秩序は、非常によくみえる形での「上品である」ことの印であり、清潔は主に社交上の美徳であって、育ちの良さの印であり、美と優美の必須条件だった（スミス 2010：250-251)。上流階級から、中級階級へと広まりつつあった価値観は、発行部数は百万部を達成した[27]『主婦之友』を通して、庶民へと清潔の価値は拡大し、衛生面を向上させたと考えられる。ただし、一般的には髪洗い粉が使われておらず、洗濯用の粉石鹸のような強いアルカリ性のものや、布海苔やうどん粉といった手間のかかる洗浄剤を用い、簡易に清潔を手に入れたわけではなかったことがうかがえた。

---

[26]『主婦之友』第 16 巻第 3 号 1932（昭和 7 ）年 p. 361.

[27] 1923（大正 12）年 に起こった関東大震災、昭和金融恐慌によって日本経済は弱体化したうえに、1929 (昭和 4) 年に世界恐慌の波にさらされた。1931 (昭和 6) 年の満州事変を契機に、日本軍は大陸へと進出し、国内はファシズムの傾向が強くなっていく。しかし、そのような政治的動きを感知しないかのように、モダンガールが女性の風俗として注目を浴び、映画の最盛期を迎え、ハリウッドの影響を強く受けるようになる（石田 2016：4)。欧米の影響を受けて、日本女性のファッションは「和」から「洋」へと変化していった。近代的職業は、自己の意思で就くこと、自由意志による転業や廃業、公私の明確な区別があることが基本的な条件であった（村上 1983)。以前からあった農業、製糸、紡績、織物に従事した女性の職場は、これらのことが通用する世界ではなかった。近代的職業に就く職業婦人の増加は、生活を多様化させ、さまざまな扱いやすい髪型を必要とし、読者の生活様式の変化が、髪型の記事数の大幅な増加へと反映させたのではないかと考えられる。

4．第3期ー戦時を色濃く伝える　1937(昭和12)年から1946(昭和21)年

『主婦之友』における頭髪に関する記事は、21本であった。テーマは、「髪形」に関する記事が18本、次いで「頭皮・頭髪の手入れ」6本、「頭皮・頭髪の療法」1本、「髪飾」1本であり、「髪に関する職業」はなかった。第2期と比較し、記事数は大幅に減少した。1941（昭和16）年12月、日本軍の真珠湾奇襲攻撃によって日米が戦闘状態に入り、太平洋戦争が勃発した。日中戦争の進展とともに情報操作を行い、巧妙に国内世論を操作し、言論の統制を行っていた。戦争内容を伝える新聞などは購買数が増加した。『主婦之友』も戦時中の節約など実用的な記事を掲載し、売り上げを保ち続けた。

テーマごとにみていくと、「髪形」は洋髪が9本、ウェーヴが7本であり、そのうち3本は鏝を使用しないパーマネントウェーヴであった。束髪が2本、断髪1本、日本髪1本であった。「銃後髷」が3本初めて出現した。質素な束髪である髪形を「銃後」という名前を用い、女性も含めて戦争に参加しているかのように身嗜みで分かるような髪形が考案された。「時節柄お鏝一つ使わず、黒髪の美を素直に生かした洋髪。すっきりとして、いかにも質実な感じの髪形。きりっと美しく、手早く結えて働きよく。結上げに3分もかからぬ、清楚な非常時向きの髪形」[28]、「パーマネントから無鏝時代へと移り変わった。銃後の婦人に相応しく、キリッとした簡潔さの中に優美さと新鮮な感覚とを盛った新時代の髪形」[29]といった記事が掲載された。赤毛や縮れ毛が肯定的に捉えられていた一期や二期と違い、黒髪を推奨する記事が多い。「われわれ大和民族の髪の特徴は漆黒にして決して波状を許さぬ。よく

図5. 職業婦人向けの銃後髷

図6. 中年奥様の銃後髷

[28]『主婦之友』第22巻第6号1938（昭和13）年p. 28.
[29]『主婦之友』第22巻第10号1938（昭和13）年p. 496.

伸びて長いふさふさとしている。この全く納れぬ髪の性質を全く無視して断髪又はパーマネントの人工は甚だしく髪の生涯を滅茶苦茶にした行為だ」と非難している。昭和 13（1938）年に警視庁がパーマネントが醇風美俗に反するとして業者の新設、移転を禁止し、昭和 14（1939）年には文部省が女性とのパーマ、化粧を禁止した。『主婦之友』で、それまで多く掲載されていた「洋髪」や「ウェーヴ」は減少し、新たに「銃後髷」を掲載して日常行為を髪形からも戦時体制に取り組んでいった。日中戦争勃発から間を置かずに、『主婦之友』は率先して「非常時」や「銃後」などの戦時における時局のフレーズを取入れた。国民精神総動員の総力戦遂行のための婦人雑誌の役割は小さくなかった。「銃後」の護りを担う女性に向け、その主旨を徹底し、指導者メディアを期待されるのは必然で、記事でも時局を反映し、愛国心を鼓舞するかのようなものが定着していった（石田 2016：182）。

次に、「頭皮・頭髪の手入れ」では、洗髪が 4 本、梳髪、染髪がともに 1 本ずつであった。梳髪を毎日し、夏場は週に 1 回以上の洗髪を行うことが記載されていたりする。しかし、洗料は布海苔や玉子を用いることを推奨している[30]。パーマネントウェーヴも使用せず、華美で凝った髪形をしない代わりに、頭髪は容易に洗浄できたのではないかと思われたのだが、いまだ時間のかかる布海苔とうどん粉を使用し続けている。昭和 13 年の記事[31]では、タイトルを「自分で工夫した簡単で優美な非常時向きの髪の結ひ方　二三分から十分以内で結べる新工夫の銃後髷」としているにも関わらず、「髪の手入れは布海苔とうどん粉」と述べ、結う時間は短くなったにもかかわらず、洗髪は時間のかかる洗浄剤を選択している。

第 1 期から第 3 期までの 30 年で、布海苔とうどん粉の支持は強く、継続して使用されていた。戦時中の女性の役割は、『産めよ殖やせよ』と子どもを兵士としてオクニにささげるという母性を通じての国策協力だけではなく、平時の性分業の体制男性的な職域に進出するという戦争協力に至るまで拡大した（上野 2009：185）。戦時下における女性の「社会進出」は、古い「家」制度からの脱却を意識させ、新たに国家への吸収につながり、戦争動員のための能動

[30]『主婦之友』第 21 巻第 8 号 1937（昭和 12）年 p. 401.
[31]『主婦之友』第 22 巻第 10 号 1938（昭和 13）年 p. 496

性を発揮し、新体制運動へのめりこんでいった（佐藤 1992）。軍国主義とは、軍人的な秩序が、軍隊だけではなく生産現場から家庭にいたるまで、社会生活にいたるところに浸透させられることであり、「市民的自由」の抹殺にほかならない（若桑 1995：21-22）。称揚すべき女性は、家庭と国家に忠実な女性であり、国民の精神を動員するために『主婦之友』も大きく働きかけた。戦時をいかに乗り越えるか、実用的な記事を掲載し、銃後を健気に支えるよう訴えた。家庭の労働以外にも「ソト」での就労を担い、重労働のなか生活をしていた[32]にも関わらず、それでも布海苔とうどん粉を選んだのは、戦中の物資が不足するなかで手に入りやすく安価であったこともあるが、やはり「大和民族は黒髪」と言われたように、黒髪を守り続けるためだったのではないだろうか。それは、女性の髪がファシズムを表し、体現することができるものであった。

なお、昭和 18 年以降、髪についての記事はなくなり、次に記事として髪について出現するのは終戦後の昭和 22 年、1947 年 31 巻 1 号からである。

5．結論

大正期に発行された『主婦之友』に掲載された頭髪に関する記事の内容を検証し、大正期から昭和中期に大衆に向けた代表的なマスメディアが頭髪をどのように報じ、変遷していったのかを考察した。

発行部数 100 万部を達成し、戦時中も発行し続けた唯一の婦人雑誌『主婦之友』は、新中産階級の「主婦」を対象とし、時代とともに変化する人々の生活

[32] 日中戦争開始にともない動員兵力は急増し、陸海軍現役軍人の数は 1937 年中に 100 万人を超え、太平洋戦争が始まった 1941 年には 241 万人、1945 年には 719 万人に達した。兵力の動員にともない、生産力確保のために必要な適正配置がなされず、その補充のために女性や青少年など未熟練労働力を大量に動員した。1939 年 7 月、国家総動員法に基づき、「国民徴用令」が公布され、16 歳から 25 歳までの未婚の女子がその対象となり、労働力の強制配置が実施された。当時、銃後と呼ばれていた国内での軍需産業に就くことは最前線の勤務地で国に報いる最善の道につながると思われ、危険度が高くとも、ほとんどの人が疑いも抱かず、軍国主義の影響を受入れ、忠君愛国の使命感を持ち、兵器生産に励むことによって、前線兵士へ直結することに意義を感じていた（後藤 1990）。日中戦争勃発以後、国民精神総動員法以下数々の動員法によって、女性の活動領域は否応なしに拡大されていった。女性は戦争の長期化に伴う男子の労働力枯渇を補う労働力の確保と早期結婚、多子多産の奨励など人的資源の確保の政策に応じていく。戦時体制下、「家」に閉じ込められていた女性の多くは職場、地域、行政機構へと進出していった（佐藤 1992）。

に対して、実用記事を提供し続けた、貴重な情報源であった。

当初は髪形については良妻賢母や日本の伝統を強く謳うのではなく、流行を追い求めた記事が多く、職業婦人など社会で働く女性の流行に敏感に反応し、発信している雑誌であった。資本主義の発展により、経済は急速に発展していき、女性の職業は拡大し、経済的自立が進んだことによって、活動量が大幅に変化し、流行を発信するモダンガールの出現や女性の活躍が大きく影響していたのではないだろうか。活動量の変化によって、髪型は変化し、インフラストラクチャーの整備が進んだことを合わせ、髪に対する清潔習慣も少しずつ変化した。

しかし、第一次世界大戦によって戦争景気を日本にもたらしたはずが、第3期に入ると、国民総動員での戦時色が強調され、雑誌のページ数の減少、言論の統制が敷かれ、生活習慣だけでなく、髪形にまで大きく影響し、変化をしていったと推察される。

今回検討した30年間の髪の手入れでは、シャンプーが発売されているにも関わらず、記事は布海苔とうどん粉を使用し続けていたことが垣間見えた。洗髪の洗浄剤にシャンプーなどが輸入され、国内生産も始まり供給されていたにも関わらず、記事ではうどん粉と布海苔を推奨し続けた。髪を結う時間を短縮しても、洗髪する時間は短縮するよりも、頭髪を傷めずに黒く真っ直ぐで長く、多く保つことに重きを置いていたことになる。さまざまな髪形を受け入れながらも、やはり女性の頭髪に対する価値観は大きく変わっていなかったのではないか。今後は、戦後、どのようにして清潔習慣と髪に関する価値観が変化していったのかを検討していくことを課題としたい。

引用文献

江馬務，1953,『日本結髪全史』創元社.

後藤敏夫，1990，戦時下の女性労働の一断面，城西大学女子短期大学部紀要，7(1)，49-69.

橋本澄子，1998,『日本の髪形と髪飾の歴史』源流社.

平松隆円，2012,『黒髪と美女の日本史』水曜社.

飯島伸子，1986,『髪の社会史』日本評論社.

石田あゆう，2016,『図説　戦時下の化粧品広告〈1931-1943〉』創元社.

石崎昇子，1993,「くらしの移りかわり」,『女のはたらき　日本女性の歴史』,総合女性史研究会編，角川書店.
木村涼子，2010,『＜主婦＞の誕生　婦人雑誌と女性たちの近代』吉川弘文館.
前坂俊之，2007,『太平洋戦争と新聞』講談社.
南ちゑ，1984,『日本の髪型』紫紅社.
村上信彦，1983,『大正期の職業婦人』ドメス出版.
落合茂，1984,『洗う風俗史』未来社.
大原梨恵子，1988,『黒髪の文化史』築地書館.
佐藤広美，1992，戦時下における女性の「社会進出」と教育科学，人文学報(230)，1-38.
坂本佳鶴恵，2019,『女性雑誌とファッションの歴史社会学』新曜社.
渋川久子，1970,『近代日本女性史①　教育』,鹿島研究所出版会.
高橋康夫，1999,『断髪する女たちーモダンガールの風景』教育出版.
上野千鶴子，2009,『家父長制度と資本制ーマルクス主義フェミニズムの地平』岩波書店.
若桑みどり，1995,『戦争がつくる女性像　第二次世界大戦下の日本女性動員の視覚的プロパガンダ』筑摩書房.
矢島美保，2002,「洗浄文化史の変遷を探って」，入江良行編,『日本の化粧文化ー明治維新から平成までー』資生堂.
山村博美，2016,『化粧の日本史　美意識の移りかわり』，吉川弘文館.
ヴァージニア・スミス，2010,『清潔の歴史　美・健康・衛生』，訳鈴木実佳，東洋書林.
横山友子，2016,「黒髪と清潔：明治中期～大正にかけての婦人衛生雑誌から読み解く黒髪の変遷」人間社会学研究集録，11，101-124.
横山友子，2018,「明治後期～昭和初期にかけての頭髪における記事分析：『婦人世界』から読み解く黒髪の変遷」人間社会学研究収録，13，171-194.
横山友子，2019,「『婦人世界』の読者相談から読み解く黒髪の変遷」人間社会学研究収録，14，53-74.

Hair care before and after the Second World War —a historical analysis of in a monthly magazine “Shuhu no tomo”.

YOKOYAMA Tomoko

This study investigates articles about “hair” in “Shuhu no tomo”, a magazine published from 1917. The women's magazine “Shufu no tomo”, which was sold 1 million and continued to be published during the war, is targeting at new middle-class “housewives”. Extracted 261 articles about “hair” for 30 years from 1917 to1946 were categorized “hair style”, “ hair care”, “hair accessory”, “Work related to hair” and “cure of hair and head”. Each 10-year category was analyzed.

The findings suggest that the desired hairstyle was changed in accordance with the women’s active social involvements and with the social infrastructure development. However, in the time of the War, as the national mobilization was emphasized, it influenced and changed not only the lifestyle but also the hairstyle of women.